

## 2. 研究の詳細

プロジェクト名	幼児期の間接互惠性の獲得を支える認知・情動的基盤の検討		
プロジェクト期間	平成 29 年度		
申請代表者 (所属講座等)	熊木悠人 (教職教育院)	共同研究者 (所属講座等)	
<p>①研究の目的</p> <p>バスの車内でお年寄に席を譲るように、我々は、見知らぬ他者に対してさえ、親切にすることがある。このような自らコストを払って他者を助ける行為を利他行動という。見知らぬ他者への利他行動では、親切をする側は一見損をしているように見える。しかし、「情けは人の為ならず」ということわざにあるように、親切にすると良い評判が生まれ、その評判を知った人からの協力が得られやすくなるため、見知らぬ他者に親切にすることも長期的には利益となり得る。このような評判を介した協力関係を間接互惠性と言う。間接互惠性と関連する行動の多くは幼児期に獲得されるが、なぜ、幼児期にそれらの行動が獲得されるのかを認知・情動発達的面から検討した研究は少ない。</p> <p>間接互惠性の成立に重要な行動のひとつとして、第三者の視点からの他者の観察によって「親切な他者」と「不親切な他者」を評価し、不親切な他者よりも親切な他者に対して親切にするという行動がある。そこで、幼児期における間接互惠性の発達を、認知・情動的面から明らかにすることを目的とした一連の研究の足がかりとして、不親切な他者よりも親切な他者を好む傾向、親切な他者に対してより利他的に振舞おうとする傾向の発達について検証した。</p> <p>②研究の内容</p> <p>親切な他者を好む傾向の発達は早く、生後 1 年未満からみられることが報告されている (e.g., Hamlin, Wynn &amp; Bloom, 2007)。他方で、親切な他者に対してより利他行動をする傾向は、実験場面では 3 歳頃 (Vaish, Carpenter &amp; Tomasello, 2010)、自然場面では 5-6 歳 (Kato-Shimizu, Onishi, Kanazawa &amp; Hinobayashi, 2013) よりみられることが報告されている。しかしながら、親切な他者を好む傾向と、親切な他者に利他的に振舞う傾向との関連について実証的に調べた研究は少ない。幼児期における両者の関連を調べることで、認知的な他者の行動への評価が利他行動に果たしている役割についての示唆を得ることができるとともに、乳児期にみられる親切な他者への選好と、後の間接互惠性の獲得との関連について考えるための材料を提供できると考えられる。</p> <p>③研究の方法・進め方</p> <p>1. 調査で使用する映像の作成</p> <p>調査で使用する映像の作成を行った。映像は、「親切な人」が出てくるもの、「不親切な人」が出てくるものの 2 種類であった。具体的には、手元にある 2 枚のクッキーのうち、1 枚を欲しいと頼まれたときに、それを快諾してクッキーを渡す人を「親切な人」、同じように頼まれたときに、それを拒否する人を「不親切な人」とした。映像に登場する、クッキーを欲しいと依頼する人、親切な人、不親切な人の 3 者の役割は、いずれも成人女性が行った。</p> <p>2. 調査の実施</p> <p>調査に協力いただいた幼稚園内の一室にて、4~6 歳児を対象とした個別調査を実施した。なお、調査実施前に調査に協力いただいた園にて園児たちとのラポール形成に努めた。書面にて調査内容を保護者に説明し、保護者の同意が得られた園児のみを対象に調査を行った。</p> <p>はじめに、参加児は PC モニターにて「親切な人」と「不親切な人」の 2 種類の映像を視聴した。映像視聴後、映像に登場した「親切な人」と「不親切な人」に対する利他行動と好みの 2 点を検討した。利他行動の測定のため、調査参加のお礼として参加児に 10 枚のステッカーを渡した。そして、親切な人 (または不親切な人) の写真を提示しつつ、その人もステッカーを欲しがっていることを伝えた。自分の持っている 10 枚のステッカー</p>			

のうち、好きな枚数を親切な人（または不親切な人）にあげることができると教示し、参加児が何枚のステッカーを分配するか記録した。このステッカーの分配の手続きは、「親切な人」と「不親切な人」それぞれに対して1回ずつ行われた。好みの測定については、まず、「親切な人」と「不親切な人」の写真を並べて提示してどちらが好きであるかを尋ねた。この質問に参加児が回答したら、続けて、なぜ、そちらの人が好きであるのかの理由を尋ねた。なお、調査時には「親切な人」と「不親切な人」の両者に対する共感を測定する課題もあわせて実施したが、本報告書では詳細は省略する。

### 3. 調査結果の分析

最終的な分析対象となった28名の参加児のうち、調査実施時において5歳半未満の16名を年少群、5歳半以上の12名を年長群とした。その上で、(A) 親切な人、不親切な人に対する利他行動、(B) 好みとその理由について、発達の差異が見られるか否か検討した。さらに、(C) 両者に対する好みと利他行動との間の関連についても検討した。なお、(B) および (C) については、親切な人、不親切な人のどちらを好むかについて、「どちらも好き」や「わからない」と回答した4名を除く24名を分析対象とした。

#### ④実施体制

研究計画の立案、映像の作成、調査の実施および分析など、研究の全過程を研究代表者が行った。

#### ⑤平成29年度実施による研究成果

(A) 親切な他人、不親切な人のそれぞれに対して分配したステッカーの枚数を図1に示す。統計的な分析の結果、分配したステッカーの枚数について、年齢や分配相手の影響はみられなかった。また、全体の約6割の参加児は、両者に対して同じ枚数のステッカーを分配していた。

(B) 不親切な人よりも親切な人を好んだ参加児は年少群で約65%、年長群では90%であった。年長群では、親切な人を好んだ参加児の約半数が、その理由として、クッキーをあげた、あるいはあげるのを拒否したという、親切／不親切な行為に言及していた。

(C) 参加児がどちらの他者を好むと答えたかによって、その両者に対するステッカーの分配枚数に違いがあるか検討したが、有意な差はみられなかった。

(A)～(C) をまとめると、以下のことが明らかになった。

- ・本研究の課題では、親切な人に対してより利他的に振舞うというはっきりとした傾向はみられなかった。
- ・他方で、親切な人を好む傾向がみられ、特に、年長群では顕著であった。
- ・親切な人を好む傾向と親切な人に利他的に振舞う傾向の間に関連はみられなかった。

#### ⑥今後の予想される成果（学問的効果、社会的効果及び改善点・改善効果）

本研究の結果を一般化するためには、より多くの幼児を対象に調査を行う必要があるが、親切な他者への好みと、親切な人への利他行動との間に関連がみられなかったことから、少なくとも幼児期においては、両者には異なる認知過程が関わっている可能性が考えられる。乳児期よりみられる親切な人への選好が、その後の利他行動と連続するか否かについては現在も議論が続いているが（e.g., Kuhlmeier, Dunfield, & O'Neill, 2014）、本研究はこの議論を進めるための材料の一つとなることが期待される。

また、本研究では、幼児が親切な人を好む傾向を持っていることがみとめられた。このことから、幼児の日常生活の中でも、親切な子どもは他の子どもから好かれやすいということが起こっている可能性が示唆される。この点を実証的に検証することで、幼児の仲間関係についてのより深い理解につながると考えられる。

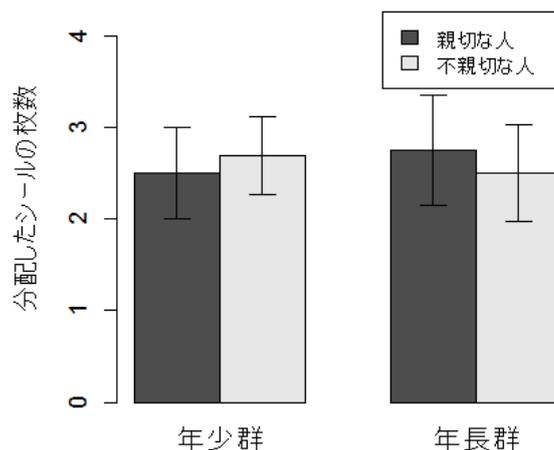


図1. 「親切な人」、「不親切な人」に対する年齢群別のステッカーの分配結果

#### ⑦研究の今後の展望

より多くの幼児を対象に調査を続ける必要がある。また、本研究では年長群においても、親切一者により多くステッカーを分配するというはっきりとした傾向はみられなかった。そこで、このような傾向の発達過程を明らかにするために、小学校低学年の児童まで調査対象を広げたり、ステッカーの分配とは異なるタイプの利他行動を用いた検討をしたりすることも重要であると考えられる。

親切な人を好む傾向や親切な人に対して利他的に振舞う傾向を持つことが、幼稚園や小学校での社会生活や、現実の仲間関係にどのように影響を及ぼしているのかを検証し、教育現場での人間関係の指導への提言へとつなげていくことが今後の重要な課題である。

#### ⑧主な学会発表および論文等

平成 29 年度の実績はない。本研究の成果は、平成 30 年度の日本心理学会において発表を行う予定である。

#### 【引用文献】

Hamlin, J. K., Wynn, K., & Bloom, P. (2007). Social evaluation by preverbal infants. *Nature*, 450, 557–559.

Kato-Shimizu, M., Onishi, K., Kanazawa, T., & Hinobayashi, T. (2013). Preschool children's behavioral tendency toward social indirect reciprocity. *PloS One*, 8, e70915.

Kuhlmeier, V. A., Dunfield, K. A., & O'Neill, A. C. (2014). Selectivity in early prosocial behavior. *Frontiers in Psychology*, 5, 836.

Vaish, A., Carpenter, M., & Tomasello, M. (2010). Young children selectively helping people with harmful intentions. *Child Development*, 81, 1661-1669.

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。